

『十地經』における慈悲について

小 坂 匡 宏

慈悲は仏教教理においては、小乗の十八不共仏法の一つ大悲 (maṭa-karuṇā) や四無量心 (慈・悲・喜・捨、あるいは『俱舍論』の五停心観の第二慈悲観のように、仏陀特有の功德や仏道の実践方法として説かれる。また慈悲は他の世界宗教が説く愛のように、宗教的な救済概念として民衆に受け入れられた。

ところで、慈悲の諸相を明らかにしていくためには、慈悲に相当する原語に即しての概念規定を示してゆくことが肝要なことであると思われる。したがって、本論稿では『十地經』の所論に拠って、『十地經』に現われる慈悲の觀念を明らかにしていくことをねらいとする。では『十地經』ではどのように慈悲が説かれるだろうか。

慈愛 (maṭṭi) と哀愍 (kṛpā) と誓願 (praṇidhāna) とによって、次第の通りに、心の行境ではなくして、意樂の通りに、智によってそれを満足させるのである。(Rd., p. 10, II. 21~24) 以下では、karuṇā の代わりに kṛpā が悲に當いられている。

続けて誓願が説かれるが、慈悲に相当する語句とともに誓願がのべられる例は他に五例現われる。したがって、慈悲と誓願とは何等かの関係があることが分かる。これに対応する『十地經論』の釈を示す。

何者因成就大。偈言「慈悲及願力」故。慈者同興「喜樂因果」故。悲者同拔「憂苦因果」故。願者發心期「大菩薩」故。此慈悲願長夜熏修不_レ同三乘一故。(『大正』二六・一三四a)

論では、慈悲の基本的立場である拔苦与樂を示したものと説明され、菩薩の慈悲と誓願が二乗とは異なることが強調されている。では菩薩の慈悲とは如何様なものであろうか。

さて仏子たちよ、菩薩は偉大なる哀愍 (karuṇā) に先行されて、健全な自然の意樂によって、ますます、一切の善根を行なう知識を完成しようとするのである。(Rd., p. 13, II. 13~15)

この用例では冒頭に「偉大なる哀愍に先行され」とあり、他に三例見出だされる。このときの大悲はいづれも mahā-karuṇā となっている。『十地經論』では次のように釈す。

論曰。深大心堅固者。煩惱小乘不能壞此觀故。転復勤修一切善根成就者。諸所説善根此地授受故。(『大正』二六・一三七a)

慈悲は堅固であり小乗が壊することはできないという、つまり小乗の慈悲とは異質なことが再説されている。さらに經には、信と慈悲とが並列に述べられている箇所がある。

かの菩薩は信(saddha)を増上し、淨信は多く、信解は清められ、多くの真実の理解があり、哀愍(kṛpā)と悲心(karuṇā)を起こし、大いなる慈心(maitrī)を具足し…(Rd., p. 13, 11. 16~20)

ところで『俱舍論』には、「実に、愛(prema)に二種ある。汚れたのと汚れていないのである。…汚れていない(愛)のは信(saddhā)である。(Pradhan ed., p. 60, 1. 8)」とし、汚れない愛(prema)を信(saddhā)と見なしている。しかし、經には慈悲の原語を三語出していながら愛(prema)を述べない。つまり、慈悲の原語が限定されていることがわかる。つぎに第二地の經説では、不殺生からはじまる十善業道が詳しく説かれ、また諸地の中で最も慈悲の用例が頻出する。

菩薩は本性として十善業道を体得している。十とは何かというと、すなわち、彼は生き物を殺すことから離れて害さない。杖や刀を捨て、怨恨の思いを捨て、慚鬼(ḍāyā)を得て、一切の生命あるものにとって利益となる憐愍の情(anukampin)と慈心(maitra)があり、生き物を思念によっても害することはない

『十地經』における慈悲について(小坂)

のである。ましてや、他の衆生のうち衆生の思いをもつ者に、恣意的に悩害することがあろうか。(Rd., p. 23, 11. 5~11)

刀杖についての經説は、原始經典にすでにあり、愛しむ(Pali. piya)が使われているが、この語もまた使われず、語句の置き換えが行われ、dayā, anukampin, maitraとなつていく。結局、愛(prema)や愛しむ(Pali. piya)は積極的に肯定される言葉ではないようである。つぎの用例でも、また同義語が多く出づくる。

またじつに、(菩薩には)瞋恚を離れた心がある。一切の衆生に慈心(maitra)があり、利益心があり、憐愍の情(dayā)があり安樂ならしむ心があり、愛情深く、一切世間に恩恵の心があり、一切の有情に利益させる憐愍の情(anukampā)がある。…彼は、慈心(maitrī)をとめない、一切衆生を利益し、安樂ならしむために、推測し判断することすべてを思いめぐらす者である。(Rd., p. 25, 11. 1~6)

この經説にたいする説明を見てみよう。

論曰。依瞋瞋障対治。為五種衆生説。一於怨讐所慈愍心。如經常起慈心二故。二於惡行衆生所。如經生安隱心二故。三於貧窮乞匄及苦衆生所。如經生憐愍心樂心二故。(『大正』二六・一四七c—一四八a)

この釈により、原語それぞれに対応する慈悲の対象が示されている。maitraは恨みや復讐心のある衆生にかける慈悲、

dayaは貧窮にあえいでいる衆生にたいする慈悲、anukampaは菩提心をおこす衆生に対して倦み疲れることのない慈悲と対応できる。

その上、十善業道の經説では声聞乘・獨覺乘の果報を受けることもいわれる。

さらに向上して、その十善業道は、般若の相によってよく修行されているとき、限定された心があり、三界の恐れを心にもち、大悲 (karuṇā) が欠けていれば、他の人より聞くに随い、音声に従うことによって、声聞乘を生ぜしめる。(Rd., p. 25, 11. 20～24)

これに対応する釈は、

捨心者捨諸衆生。如_レ經遠_レ離大悲故。(『大正』二六・一四八c) という。声聞は衆生を捨てる相があるということとは、大悲 (karuṇā) が欠けていることであるという。(つづいて、

さらに向上して、清浄になっていくと、他の者に随わず、獨存性によって、他人より知性を受けず。大悲 (karuṇā) の方便が欠けていて甚深なる緣起を悟ることによって、獨覺乘を生ぜしめる。

(Rd., p. 26, 11. 1～4)

とあり、これに対応する釈は、

自正覺故。不起心說法。不堪_レ說法故。如_レ經不能_レ具足大悲方便故。(『大正』二六・一四八c)

とある。説法することができないことは、大悲 (karuṇā) の方便が欠けていることであるというこの二つの説明により二

乘と異なる菩薩の大悲 (karuṇā) とは、衆生をすてずかつ説法することではなければならない。さて、先に示したように、次の一節も注釈では慈悲の対象が示されている。

かの菩薩は、ますます一切衆生の近くにおいて、利益の心性を生じさせ、安樂の心性を、慈しむ (maitra) 心性を、哀愍 (kṛpā) する心性を、憐愍 (daya) する心性を、恩恵の心性を、守護の心性を、平等の心性を、師の心性を、教師の心性を生ぜしめる。(Rd., p. 27, 11. 13～16)

十種類の心性について述べられているうち、慈悲の原語が三語ある。『十地經論』ではどのような説明がなされているだろうか。

三者於_レ怨憎衆生不_レ念加報。如_レ經慈心故。四者於_レ貧窮衆生欲_レ令_レ遠_レ離彼苦。如_レ經悲心故。五者於_レ二衆衆生欲_レ令_レ三不放逸。如_レ經憐愍心故。(『大正』二六・一五〇a)

この説明により、maitra は恨み憎しみをもつ衆生に対する心、kṛpā は貧窮にあえいでいる衆生の苦を除こうという心、daya は樂をしている衆生を不放逸にさせようという心となる。前述の説と比べると、maitra だけは概念が一致し他の二語は異なり、原語に対応する概念に多義あることが現われている。さらに第四地以降には、次のような定型句がでる。

一切衆生を顧みるから、誓願 (pūrvapraṇihana) を出生することに支えられているから、大悲心 (karuṇā) を先としているか

ら、大慈を (maitrī) 心具足しているから、(Rd., p. 39, 11. 12~13)

冒頭に「一切衆生を顧みる（漢訳では一切衆生を捨てず）の句が説かれる。前述のように、菩薩の慈悲行の一つとして説かれ、經典では計三回出てくる。

また *anukampa* の用例は第五地でも見出だされる。

一切の衆生に憐愍の情 (*anukampā*) をもつためである。(Rd. p. 44, 1. 14)

論ではその具体的な様相をどのように説明しているだろうか。

三住貧乏衆生興一切資生之具。如經憐愍一念一切衆生二故。

貧乏な衆生に資生の具を与える救済であるとしている。つまり精神的なものとしてより、日常的な財施の行として説明されている。

特徴ある用例だけを示したが、結論としては次のようにいえるであろう。『十地經』では慈悲と誓願を類比的に説いている。また、慈悲の原語としては原始經典や部派の論書にある愛 (*prema*) や愛しむ (*Pāli. piya, Skt. priya*) の語は用いられず、上記のように五語のみである。『十地經論』では慈悲に相当する語句について個別に概念規定が行われつつ個々の語に多義性をもたせている。さらに、二乗とは異なる菩薩の大悲が強調され、心理的な慈悲の意味合いをもたせながら、

『十地經』における慈悲について（小坂）

財施の慈悲のように具体的な行として説明されているのである。

(註記略)

〈キークワート〉『十地經』 *maitrā' karuṇā' kṛpā' dayā'*
anukampa

(大正大学綜合仏教研究所研究員)

新刊紹介

吉田久一 編集・解説

現代仏教思想入門

A 5判・三一二頁・定価三、五〇〇円

筑摩書房・平成八年二月